くまさん だより

2024年
5月号
5月9日発行

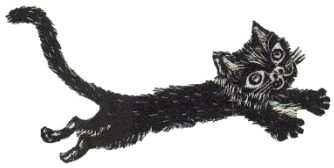
日本基督教団 豊橋東田教会
〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112　☎0532-54-3435
公式サイト https://azumada.org/　中島 善子牧師

イラストは全て池谷陽子さんご提供

4月21日　主日礼拝

「喜びなさい」中島 善子牧師

フィリピの信徒への手紙　4章2～7節　新約聖書365～366頁



礼拝後、2024年度の教会総会を行います。そこで、今年度の教会主題聖句であるフィリピ4:4-5を含む箇所を取り上げ、御言に聴きます。このフィリピの信徒への手紙はパウロが獄中から送った手紙で「獄中書簡」とも呼ばれています。この他にエフェソ書、コロサイ書、フィレモン書も獄中書簡と呼ばれています。獄中にあってもパウロが熱く伝えたことを、私達も聴き取りたいと思います。

今朝の箇所に「主において」と言う言葉が2節と4節に出て来ます(日本語訳は違うが、1節も同じ)。「主において」とは「主の中で、主に属して、主につかまれて、主に愛されて、主に従う中で、主の交わりの中で」という意味合いになります。

キリストは神の独り子ですが、すべての人に罪の赦しを与えるため、罪の赦しの代価となり、十字架でご自分の命を献げ尽すことで、神の御心と1つになられた方です。従って、「主において」を言い換えるならば、「自分と言う頑ななエゴの砦から出て来て、誰よりも低くへりくだったキリストの中に飛び込むこと。十字架のキリストに属し、キリストと1つにされて生きること」です。勿論、十字架は行き止まりではなくて、キリストは十字架の死から復活された。しかし十字架なしに、復活はない。十字架の死を抜きにして、死からの復活はない。復活に向かうためにこそ、復活に至るためにこそ、キリストの十字架の死がある。そして朽ちる定めの私達に向かって「死からの復活」を成し遂げたキリストと結ばれて、キリストと1つになるようにと、聖書は2000年前から告げて来た。

教会には、色々な人がいるし、色々な人がいて良い。しかし色々な違いがあっても、キリストの体が1つであるように、キリストの体である教会もまた1つであり、教会を分裂させてはならない。そこで大事なことは、一人一人が「自分の良し」から脱皮して、一人一人が「神の善し」の中でこそ、1つになることです。従って教会は様々な違いを持ったまま、様々な違いを乗り越えて、「神の善し」の中で1つになる恵み、1つにされる幸いを、この世に向かって、証しして行く群れです。

とは言え、教会はこの世にあって順風満帆ではない。コリント教会を始め、フィリピ教会も、パウロが伝えた最初の福音とは異なる教えを持ち込んで、教会を混乱させる者が現れた。しかも彼らに同調する人々も現れ、教会は分裂の危機に瀕していた。そのことを知ったパウロが獄中から書き送ったのが、この手紙です。「せっかく天の国籍をいただいたのだから、復活の主と同じ体になる約束を受けたのだから、それをムダにしないで欲しい。キリストと結ばれて、1つの体、1つの群れとされて、救いの目標を目指し、歩んでほしい」と必死にパウロは訴えます。

そしてパウロは、2節でエボディアとシンティケと言う、婦人の名を挙げます。2人はパウロを助けて、教会でも大きな働きをしていたのでしょう。けれども仲たがいをしたか、コリント教会に影響をもたらしていたようです。

教会でも意見の衝突が起きる。悪意ではなく、「良かれ」と思ったことでも衝突は起きる。「良かれ」と思ったことだから、衝突した時は面倒で、互いに引くに引けなくなる。それを知るパウロは、婦人に勧めます。「互いに自分の思いを捨てて、主において、主キリストの中で同じ思いを抱きなさい。キリストの中でこそ1つ思いになって和解しなさい。キリストの中で和解することで、教会を分裂させる力と、これからも共に戦っていきなさい」。

2人の婦人が和解した後も教会に留まって、共に力を合わせられるようにと、パウロは他の教会員の協力を求めます。パウロは未知の土地でも大胆に福音を語る伝道者ですが、同時に教会に細やかな

配慮をする優れた牧会者でもありました。彼の牧会の優れた点は、教会のため、教会員一人一人が互いに配慮し合える者となるよう支えて、励ます点です。教会への配慮は、特定の人の務めではない。教会全体の務めです。主において(主にあって)、教会を造り上げることは、主にある人格へと、教会を造り上げることだからです。そしてキリストが中心に立つ教会になるよう働くことが、同時に教会に集う一人一人を「エゴを捨てて、キリストが中心に立つ人格(愛とへりくだり)へと養い、育てていく」からです。従って主に結ばれた教会形成の闘いは、ますます主に似た者とされて行く闘いであり、各人の信仰が主と1つに結ばれた信仰へと形作られて行くための闘いです。そしてその闘いは「主にある喜び」をもたらす。だからパウロは言います。4-5節。

「主において、常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます」。

ムリに「喜べ」と言うのではない。喜びの源である主キリストが、あなたのすぐ近くにおられるから、喜びなさいと言う。喜びの原因であるキリストが、あなたと共におられるから、あなたの中におられるから、喜びなさいと言う。

私達にとって最上の喜びとは、十字架で死んで復活されたキリストが、私達と共にいてくださる喜びです。死から復活された主キリストと私達が、1つにされる喜びです。復活の主が近くにいてくださる。この最上の喜びに目を開かれた者は、復活の主が片時も私達を離れないことを喜ぶ。主が共におられるから、生も死も、すべての時を喜ぶ。それ故、主が共におられる喜びが教会に、また一人一人に満ち溢れるよう、パウロは願う。

その反対に主を見失ってしまうと、人はすべてを自分で抱え込んでしまい、思い煩って、喜べない。主を見失ってしまうと、自分の尺度で相手を裁き、自分も裁いて喜べない。でも私達が主を見失っても、決して主は私達を見失わないし、私達を見捨てない。だから「喜びなさい」とパウロは言う。

またすぐ近くにおられる主を差し置いて、すべて自分で抱え、自分勝手に思い煩うのは、やめなさいとパウロは言う。

即ち主がすべてを完全に把握し、公正に審き、最上の決着をつけてくださることを思い起こして、感謝を込めて祈りと願いを献げ、求めていることを、主に打ち明けることが、信仰者としてのふさわしい在り方なのです。

十字架で死に、復活されたキリストが私達と共におられます。私達は今、主の御前で生きています。この主の近さに目覚める時、私達は主と向き合い、主の御前で祈り願い、求めているものを、主に打ち明けられる。その時、人知を超えた神の平安と最善の道が拓かれ、私達は心から主を喜ぶことができる。この主の近さを、パウロは常に心から信じて、主の御前で生きていたから、主が共におられる喜びに満たされていたから、獄中であろうと、どこであろうと、あらゆる隔てを超えて「喜びなさい」と、フィリピ教会、そして私達に告げます。

新年度の教会の歩みが始まりました。神の救いが完成する終わりの日が来るまで、地上の教会は未完成であり、信仰者の復活も始まっていません。今は教会も信仰者も、終わりの日の救いの完成を地上において待つ時です。でも空しく待つのではなくて、確信と喜びと共に、終わりの日を待ち望む。それは空しい楽観主義ではない。

なぜなら私達は教会に属し、教会はキリストの体であって、教会の頭はキリストだからです。しかも教会の頭であるキリストは、復活して天におられます。だから終わりの日、すべてのキリストの体(すべての教会とすべての信仰者)は、頭であるキリストに続き天に引き上げられて、復活し、完成することを待望しています。

教会はキリストの体であり、体の一部分である頭のキリストは、既に復活して、天におられる。そして頭と体は決して切り離されず、1つのキリストの体です。1つの体だから、教会の頭であるキリストがおられる天に、体である教会もまた引き上げられます。頭であるキリストに起きた出来事は、終わりの日に、教会の出来事となり、教会に属する私達一人一人の出来事となります。

「喜びなさい」。喜びの根拠は、キリストと1つに結ばれていること。キリストの体に結ばれて、キリストの体の一部とされていることです。

それ故、終わりの日には、キリストの復活に続き、キリストと結ばれたすべての信仰者が復活します。「主はすぐ近くにおられる」どころか、私達は復活の主キリストと1つに結ばれているのです。私達は復活の主と共にいるのです。

主は天におられます。けれども天におられる主と私達は、1つの体として結ばれている。そして主は惜しみなく、私達に御自分を与え、支え、導いてくださる。だから主に結ばれている私達は常に喜べる。「主において常に喜びなさい」。この御言そのものを、私達は生きて行きます。

聖書の言葉はすべて以下から引用しています。
聖書 新共同訳：
©共同訳聖書実行委員会
Executive Committee of The Common Bible Translation
©日本聖書協会
Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988